

## 4-7 漁業

琵琶湖の漁獲量は1955年をピークに減り続けています。その背景には、魚の産卵繁殖場が減少したことや水草の過剰な繁茂、外来魚やカワウによる被害など、様々な原因が考えられます。

### 1. 琵琶湖で漁獲される魚や貝

セタシジミやニゴロブナ、ホンモロコ、ビワマスといった琵琶湖にしかない魚介類(琵琶湖固有種)のほか、アユやスジエビなど様々な魚介類が漁獲されています。ニゴロブナはふなずしの原料としてよく知られています。

### 2. 琵琶湖の漁獲量 (図4-7-1、図4-7-2)

漁獲量は2016年には外来魚を除くと947tとなっており、セタシジミなどの貝類やニゴロブナやホンモロコなどのコイ科の魚が減っています。生産額は1980年代には約50億円でしたが、2009年には12億円程度まで落ち込んでいます。

#### (1) アユ

琵琶湖漁業で最も漁獲量が多い魚種であり、食用として利用される他に、姿形が美しく、友釣りによく釣れることから、「琵琶湖産アユ」という名前で養殖用や河川放流用として生きたまま全国へ出荷されています。かつては全国の放流用種苗の70%以上を占めていましたが、近年では20%程度に減少しています。

#### (2) ニゴロブナ、ホンモロコ

ニゴロブナは外来魚のオオクチバスが増えた1985年頃から減少しました。ホンモロコは産卵期に琵琶湖水位が急激に低下し、多くの卵が干上がった1995年を境に急激に減少しました。しかし、これら魚種は近年では種苗放流やヨシ帯造成、外来魚駆除、資源管理などの取組により、漁獲量に回復の兆しが出てきています。

#### (3) セタシジミ

1950年代には5000t~6000tの漁獲がありましたが、近年では40t程度まで減少しています。砂地が減ったことや水草が過剰に繁茂したところでは湖底の泥化が進み、生息場所が少なくなったことが減少原因と考えられています。

### 3. 漁獲量を増やすための取組

稚魚や稚貝の放流、魚類の産卵繁殖の場となる水ヨシ帯や砂地の造成、水草の刈り取りや外来魚の駆除など様々な取組が行われています。また、漁業者によって、小さい魚や貝を獲らないという、水産資源管理の取組が行われています。

### 4. 他の水産振興に係る取組

漁獲量を増やす取組に加えて、漁業の担い手確保や琵琶湖産魚介類の魅力を発信し消費量の拡大を目指した取組も併せて進められています。

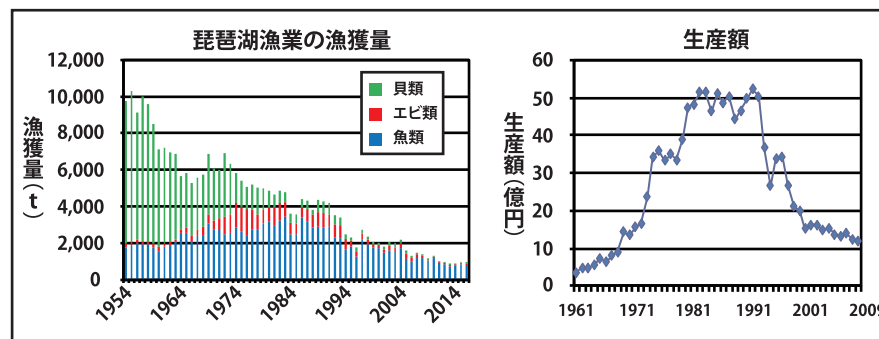


図4-7-1 琵琶湖漁業の漁獲量と生産額の推移  
(農林水産省 漁業・養殖業生産統計)

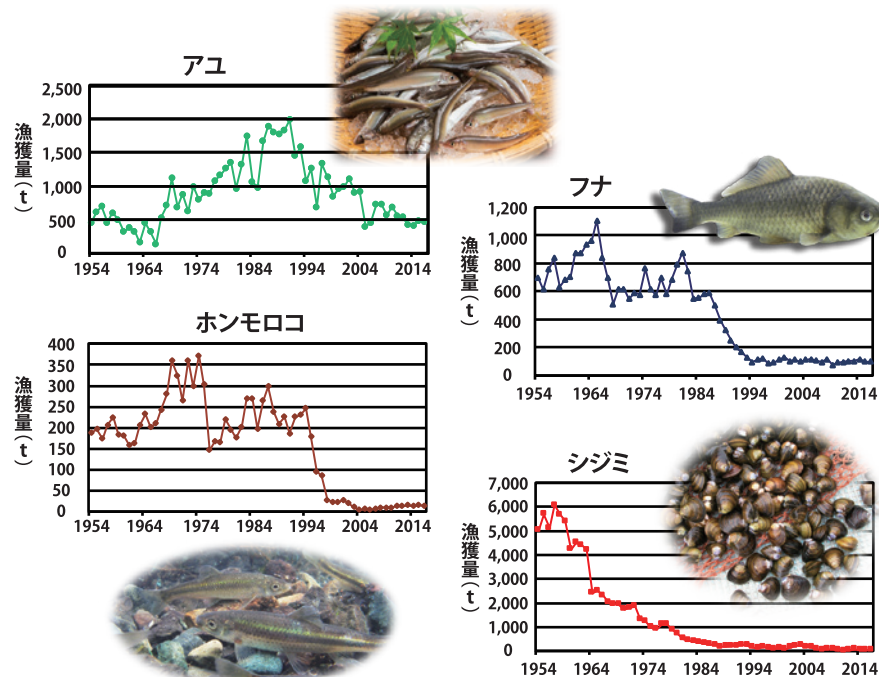


図4-7-2 アユ、フナ、ホンモロコ、シジミの漁獲量の推移  
(農林水産省 漁業・養殖業生産統計)